Architectural Institute of Japan

日本建築学会九州支部研究報告
第42号　2003年3月

ハンセン病療養施設の歴史的変遷に関する研究
－国立療養所沖縄愛楽園の事例－

正会員○楠木雄一朗*2　同　友清貴和*1

5．建築計画－2．各種建物・地域施設
ハンセン病　沖縄県　療養所　配置図　変遷

1．研究の背景

日本のハンセン病に対する対策は1907年に「癩予防ニ関スル件」の制定に始まる。1931年に全面的に改正され1953年には「らい予防法」となり、全ての患者を療養所に終生隔離するという厳しい対策をとった。1996年の「らい予防法の廃止」によって一般医療機関で治療されることとなる。

一方沖縄県は、ハンセン病患者が多く、早急のハンセン病対策が求められていた。また、終戦後、本土との行政分離を強いられ本土の政策をもとに、独自のハンセン病政策がなされてきた。

2．研究の目的

本研究は敗戦から本土復帰（1945年～1972年）まで米軍統治下にあり本土と行政分離をされた沖縄において、ハンセン病療養施設がどのように変遷していったのか、また、入所者の居住空間はどのようなものであったのかを明らかにすることを目的としている。

3．研究の方法

本研究を進めるにあたり以下の2つの作業を行った。
①ハンセン病に関する資料・文献および配置図・平面図の収集を行う。（9月19～21日、10月9～12日の2回にわたり沖縄愛楽園と沖縄県公文書館を訪問する）
②次に各年代ごとの配置図をもとにハンセン病療養施設の歴史的変遷についてまとめる。

4．調査対象施設概要【図1】

今回、調査の対象とした施設は国立療養所沖縄愛楽園（以下、愛楽園と記す）である。名護市の屋我地島北部に位置し、敷地面積300,632㎡、建物面積34,424㎡、入所者数367人、平均年齢73.5歳である。

5．入所者数の推移【図2】

開園当時の収容患者数は315人（定員250人）であった。その後、1944年日本軍により行われた強制収容によって835人まで増加するが、戦時中の逃走者や戦後の生活の苦しさで死亡者が多発し1946年に518人まで減少する。1947年には米軍により再び強制収容が行われ1959年には947名とピークに達した。その後1961年の在宅医療制度スタートや軽快退所者の増加、新発生患者の減少により入所者数はゆるやかに減少している。近年は高齢化の進行により2002年11月現在入所

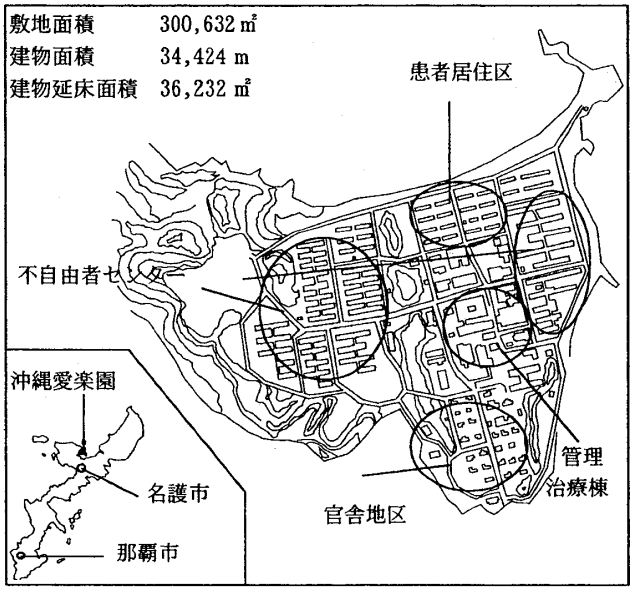


図1　沖縄愛楽園配置図

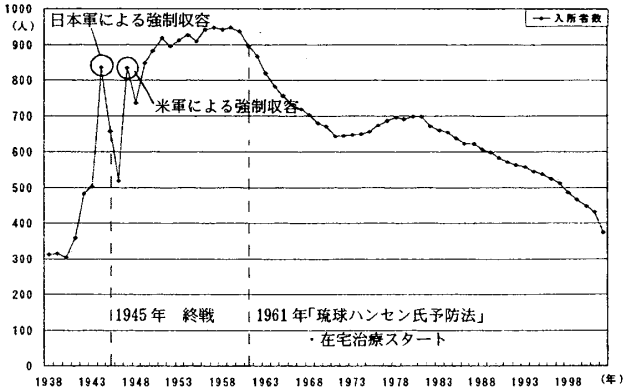


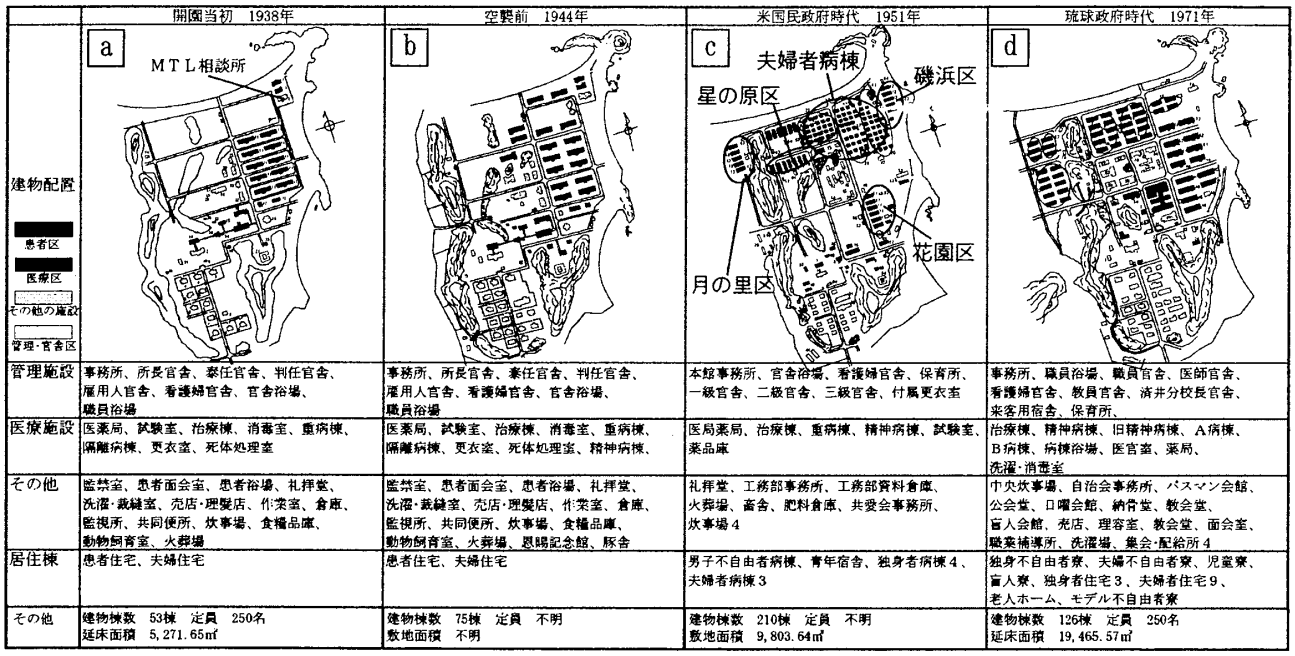
図2　沖縄愛楽園における入所者数の推移

Study of Historical Transformation of Sanitarium for Hansen's DiseaseA Study of Historical Transformation of Sanitarium for Hansen's DiseaseA Study of Historical Transformation of Sanitarium for Hansen's Disease

KUSUNOKI Yuichiro,TOMOKIYO Takakazu

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan



	開園当初 1938年	空襲前 1944年	米国民政府時代 1951年	琉球政府時代 1971年
管理施設	事務所、所長官舎、奉任官舎、判任官舎、雇用人官舎、看護婦官舎、官舎浴場、職員浴場	事務所、所長官舎、奉任官舎、判任官舎、雇用人官舎、看護婦官舎、官舎浴場、職員浴場	本館事務所、官舎浴場、看護婦官舎、保育所、一級官舎、二級官舎、三級官舎、付属更衣室	事務所、職員浴場、職員官舎、医師官舎、看護婦官舎、教員官舎、済井分校長官舎、来客用宿舎、保育所、
医療施設	医薬局、試験室、治療棟、消毒室、重病棟、隔離病棟、更衣室、死体処理室	医薬局、試験室、治療棟、消毒室、重病棟、隔離病棟、更衣室、死体処理室、精神病棟、	医局薬局、治療棟、重病棟、精神病棟、試験室、薬品庫	治療棟、精神病棟、旧精神病棟、A病棟、B病棟、病棟浴場、医官室、薬局、洗濯・消毒室
その他	監禁室、患者面会室、患者浴場、礼拝堂、洗濯・裁縫室、売店・理髪店、作業室、倉庫、監視所、共同便所、炊事場、食糧品庫、動物飼育室、火葬場	監禁室、患者面会室、患者浴場、礼拝堂、洗濯・裁縫室、売店・理髪店、作業室、倉庫、監視所、共同便所、炊事場、食糧品庫、動物飼育室、火葬場、恩賜記念館、豚舎	礼拝堂、工務部事務所、工務部資料倉庫、火葬場、畜舎、肥料倉庫、共愛会事務所、炊事場4	中央炊事場、自治会事務所、バスマン会館、公会堂、口唱会館、納骨堂、教会堂、盲人会館、売店、理容室、教会堂、面会室、職業補導所、洗濯場、集会・配給所4
居住棟	患者住宅、夫婦住宅	患者住宅、夫婦住宅	男子不自由者病棟、青年宿舎、独身者病棟4、夫婦者病棟3	独身不自由者寮、夫婦不自由者寮、児童寮、盲人寮、独身者住宅3、夫婦者住宅9、老人ホーム、モデル不自由者寮
その他	建物棟数 53棟 定員 250名 延床面積 5,271.65㎡	建物棟数 75棟 定員 不明 敷地面積 不明	建物棟数 210棟 定員 不明 敷地面積 9,803.64㎡	建物棟数 126棟 定員 250名 延床面積 19,465.57㎡

図3　年代ごとの配置図

者数367名、平均年齢は73.5歳となっている。

6．沖縄におけるハンセン病対策の歴史

◇開園当初（1938～1943）【図3-a】

日本MTL[注1)]の救癩活動で沖縄MTL[注2)]相談所を設置。1938年11月10日その地に「県立国頭愛楽園」としてハンセン病療養施設が開園。

◇沖縄戦前（1943～1944）【図3-b】

1941年7月1日に厚生省に移管。愛楽園の定員は450人になり、施設拡張工事が進められる。

◇琉球列島米国民政府時代（1945～1951）【図3-c】

終戦後、一時的に沖縄行政は真空時代となったが、間もなく米軍政府がらい行政を行うことになった。

◇琉球政府時代（1952～1971）【図3-d】

1952年、琉球政府の創立に当たり、療養所は琉球政府の所管に移管。沖縄愛楽園と改称される。1961年8月、琉球政府は「琉球ハンセン氏病予防法」を制定、公布。本土の「らい予防法」にない「在宅治療制度」という画期的な制度が織り込まれた。

この制度導入後、これ迄隔離政策を恐れ、在野に隠れていた患者は、在宅治療の場に、治療を求めて集まり沖縄県内の登録患者数はピークに達する。

◇本土復帰（1972～）

1972年5月、本土復帰。復帰によって「ハンセン氏病予防法」は廃止になった。法廃止後も沖縄のみ「在宅治療制度」は継続実施され、今日に至っている。

6．建物配置の変遷

◇開園当初

建物配置図で見られるように愛楽園は屋我地島の最北端から施設整備が始められた事で正門付近に官舎が配置されている。敷地の総面積54,246㎡、建物棟数50棟、建物延面積2,537㎡。居住舎は沖縄MTL寄附による4棟をはじめ、1棟165㎡の平屋建瓦葺の居住棟が10棟。このほか共同炊事場、消毒室、重病室、浴場、売店、理髪室、隔離病棟、洗濯場、礼拝堂、事務本館、医局、薬局、試験室、治療室、面会室、それに職員官舎の高等官、判任官、傭人官舎と53棟の建物があった。

◇沖縄戦、空襲前

1941年7月1日、国頭愛楽園は国立に移管されると同時に450床増床され、これまで運動場として利用されていた場所に居住棟が建てられた。当時の愛楽園は純日本風の切り妻造り住宅で、計65棟の建物が建ち並んでいた。

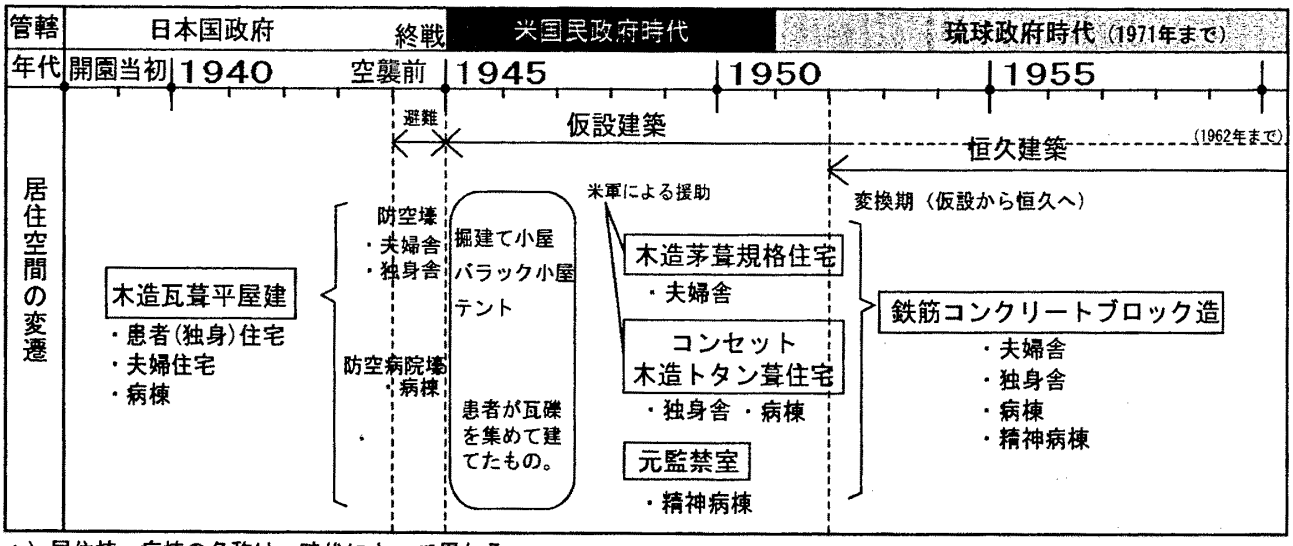
空襲後の1945年、愛楽園の建物65棟の内、焼失、全壊、半壊したのが58棟で、傷つきながらも使用できたものは、婦長官舎、医局、職員浴場、面会室、動物飼育室、監禁室、恩賜記念館の7棟であった。

◇琉球列島米国民政府時代

終戦後、愛楽園の復興を始め、従来の療養所の形態でなくそれぞれの生産技能者別のコロニー[注3)]方式の形態を作り出していた。コンセット5棟を一区として、治療棟や病室を中心にし、近くに不自由者寮、少

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan



＊）居住棟・病棟の名称は、時代によって異なる。

図４　居住空間の変遷

年・少女寮など介護を要するグループと、その介護に当る青年や乙女たちの寮を一群にして「花園区」、北海岸の磯近くに漁をする人たちが暮らす「磯浜区」、農作業に便利な西側耕地寄りが「月の里区」、入園者自治会業務に従事しやすい地域に「星の原区」、といった区分けだった。茅葺規格住宅は、夫婦40～50世帯を１区として３つの区に区画した。

病棟が爆破されたあとは「恩賜記念館」を病棟として使用したり、監禁室を精神病棟に使用するなどして病棟不足を補っていた。

◇琉球政府時代

琉球政府は、1951年よりこれまでの仮設建築から恒久建築への変換を推進。愛楽園も、戦後の混乱状況からようやく立ち直ってきた。この頃、現在の愛楽園の基礎となる配置計画が行われた。1952年鉄筋コンクリート、重病棟と治療棟を兼ね愛泉病院が建設された。1962年には、仮設建築の茅葺規格住宅はほぼ解消された。その他、宗教施設やレクレーションセンターなど医療施設以外の施設の充実が図られるようになった。入所者の高齢化に伴い老人ホームも見られる。

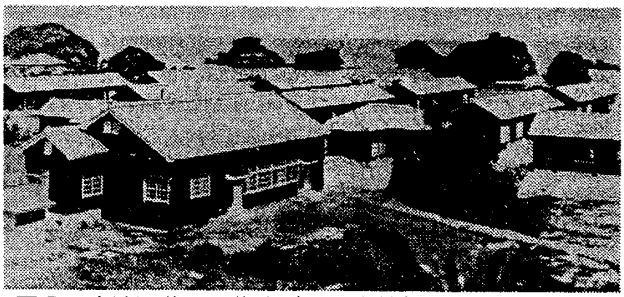


図５　木造瓦葺平屋住宅（居住者棟）

７．居住空間の変遷【図４】

配置計画【図３】をもとに、各年代における入所者の居住空間の変遷をまとめる。

◇開園当初(1938～1943年)

居住棟は、１棟当り165㎡木造瓦葺平屋建【図５】。10棟中４棟は女子寮、６棟は男子寮であった。1棟５室に分け、中央の１室が食堂。夫婦舎、少年舎もあり自治的に共同生活していた。

◇沖縄戦、空襲前（1944～1945）【図６】

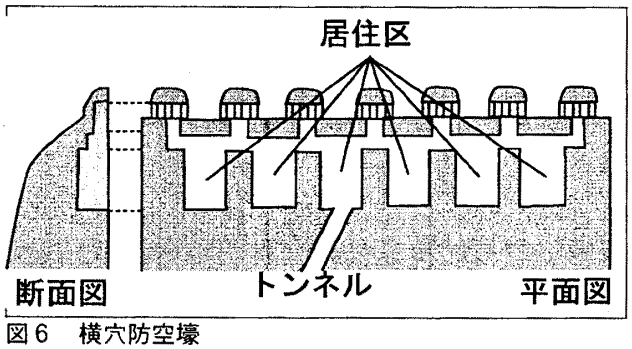


図６　横穴防空壕

戦争の悪化に伴い、防空壕の建設が入居者によって行われた。愛楽園内に重病者【図６】、保育所、医局用の壕が合わせて約60ヶ所作られた。

◇琉球列島米国民政府時代（1946～1951）

廃墟に帰した愛楽園は、入園者自ら焼け残りの材料を拾い集め、バラック、掘建て小屋をつくった。夫婦舎は２人の、独身者は気の合ったもどうしが一緒になって雨露をしのぐ程度の掘建て小屋を建てた。

1946年になると、米軍からもらい受けたコンセット資材を使い、若者が主になって病棟や居住棟の組み立

NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

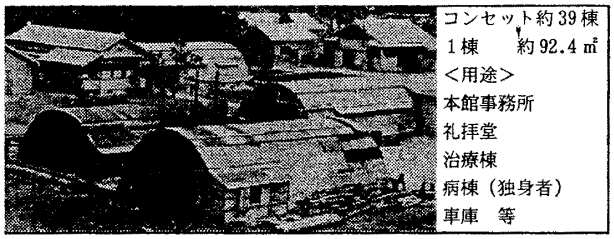


図7　コンセット

図8　茅葺規格住宅

て作業が始まる。

コンセット【図7】は、フィートを用いて設計され、屋根はアーチ型のトタン葺、アーチとアーチの間が4フィート（約1.2m）ある。床はベニヤ板張りで床幅は20フィート（約6m）であった。出入り口は2ヶ所つけられていた。1947年夫婦たちの仮住宅建設が進められ、1棟2世帯入居、間口18フィート（約5.4m）奥行き18フィートの茅葺規格住宅【図8】ができた。

◇琉球政府時代

恒久建築がスタートし2階建ての独身棟【図9】が建設された。独身棟は、1階には14畳の大部屋が4部屋、便所、食堂、浴場がついていて、1部屋の定員が7人であった。2階も1階と同様間口2間奥行き3間半の4つの大部屋が並んでいた。男女の部屋は分かれていたが、年齢層や趣味、好み性格的にも全く異なるものが同じ部屋で生活をしなければならなくトラブルが絶えなかったという。

1960年頃から脱大部屋機運が高まり、1979年鉄筋コンクリート平屋建、1棟8部屋の4畳半の個室制、

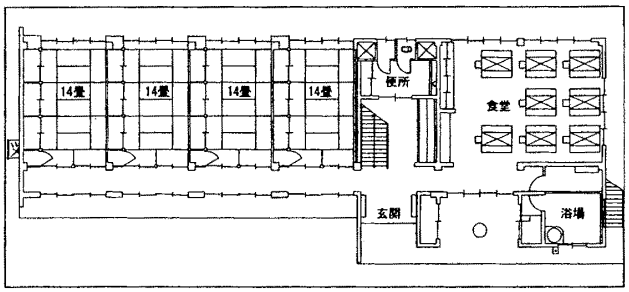


図9　独身寮1階平面図（14畳大部屋）

箪笥、押し入れ、シャワー、トイレ付の、独身不自由者棟60床が完成した。

7. まとめ

配置計画は、1938年の開園当初必要最小限の施設でスタートしてから、戦前までは入居者の増加に伴う施設拡張が繰り返された。戦後、園内のほとんどの建物を焼失する。琉球米国民政府のもとコンセットや茅葺住宅などの仮設建築を生産技能者別のコロニー[注3]方式を用い独特の施設配置となる。琉球政府時代、園内の本格的な復興が始まり恒久建築が建ち始める。現在の基礎となる施設配置が行われた。

居住空間は、開園当初木造瓦葺住宅平屋建で、内部空間についての詳細はわからない。しかし、入所者数が定員数を超えていることから雑居生活をしていたと考えられる。戦争が始まると、防空壕での生活が始まる。戦後、入所者たちは居住空間を確保するため自ら瓦礫を集め掘建て小屋を建てる。その後米軍の援助を受けコンセットや茅葺住宅での生活となる。これらはいずれも仮設建築であり戦後の混乱期を一時回避するためものであった。琉球政府時代になると入所者の寮舎も仮設建築から恒久建築へと移っていく。しかし、14畳の大部屋に7人での雑居生活であった。その後、個室化への要求が高まり1979年に個室制の独身不自由者棟が完成する。変遷の特徴として、戦後に仮設建築によって一時的に居住空間を確保した時代と、恒久建築により安定した居住空間を獲得し、大部屋から個室へと変化していった時代の2つに分けられる。

愛楽園の配置計画・居住空間ともに、沖縄県のハンセン病政策より、時代背景とハンセン病行政を行う政府に影響を受けていることが明らかになった。

今後の検討として、療養所内で入所者がどのような生活をしていたのかを明らかにしていきたい。

－注釈－

注1）日本最初の民間の救らい支援団体

注2）日本ＭＴＬの沖縄支部

注3）集団居住地

注4）アーチ型のトタン葺きで建てられる仮設の建物

－参考文献－

・平成13年度修士論文
　ハンセン病療養施設の建築計画に関する研究　西室田　周作
・命ひたすら　療養50年史国立療養所沖縄愛楽園入園者自治会
・沖縄における癩管理の現状　　犀川　一夫

＊1　鹿児島大学教授・工博　　Prof.,Dept.of architecture,Kagoshima univ,Dr.Eng
＊2　鹿児島大学大学院　博士前期課程　　Gradiate school,Dept.of architecture,Kagoshima univ

NII-Electronic Library Service